

# どれみなのはなし

## そのに



きんどんてい にゃんこう  
金井亭 猫好

もくじ

キス・きす・KISS .....	3
キス・きす・KISS のこと .....	10
その夜のMAHO堂 .....	11
あとがき .....	15

まえがき

おひさしぶり でしょうか？  
 TVアニメ『おジャ魔女どれみ』の本その2です。  
 とりあえず、パトレイヌ以後「もっつと！」まで  
 一気に見まして、いろんな意味で恥ずかしさがアッ  
 プしている上に薄い本になってしまいました。あ  
 まりいじめないでくださいね。(表紙をお願いしてい  
 る姉には、すでに見せられない原稿になってしま  
 いましたので )  
 では『どれみはなし』それに、どうぞご覧だ  
 さいませ。

酒処 金井亭亭主敬白

イラストレーション……くどう 久遠 一海 かずみ

## キス・きす・KISS

\*\*\*\*\*

あつたかい春の日。あたしたち妖精にとっては天国みたいな午後。

でも、のんびりとしてもいられない。だって

「こりゃ、ララー！ごろごろしとらんで、キャンディの仕込みでもせんかい!!」

ほーらね。あたしの持ち主はホント妖精<sup>ひい</sup>使いが荒いんだから。

「どれみたちはまだ学校よ。あたしたちだけでどうするつもり?」

「もつじき来るじやろ。わしらはこの体じゃから、準備だけはドドたちが来る前におかんとな」

はいはい。やっぱりいつも通り、忙しい日になりそうだわ。

「こんにちは」

チヨコとキャンディの準備を済ませて一息ついたころ、扉からふたり飛び込んできた。

「あ、どれみ。　あら、あいちゃんとおんぶちゃんは?」

「おんぶちゃんは夕方までお仕事だって」

ドドがやれやれ、って感じのポーズをとったから、あたしは頭を軽く叩いた。おんぶちゃんだって、なかなか来れないの気にしてるものね。

「あいちゃんはおんぶちゃんの代わりに掃除当番やってるわ。わたしもやるって言ったんだけど、マジョリ力がまたうるさいからって」

「うるさくて悪かったの」

ああ、ふたりとも固まっちゃった。二年もつきあっていると、変なところで息が合っちゃうね。

「げ、マジョリカー」

「ばかも〜ん！ 師匠に向かって『げ』とはなにこと  
じゃい!!」

「だあ〜ってさ。マジヨリカ師匠らしいことなんて  
してないじゃん。最近はとくにさ」

「お、ま、え、らー!」

ま、いつも通りか。それにしても ふふ。結構  
いいところ突いてるじゃない。

「まあまあ。普段の行いってものですよ。 で、ど  
れみ、モモちゃんとは今日も別なの?」

「うん。関先生がなにか聞きたがってるんだって。す  
ぐにくると思うけど」

マジヨリカがちらつとこっちを見てる。しばらく  
は仕方ないんでしようけど、ねえ

\*\*\*\*\*

「Hello コニチハ。すぐ着替えるネ」

どれみたちの着替えが終わって粉の準備をしてい

るころ、元気な声が入ってきた。

「おお、来たかモモ。これで妖精四人じゃからキャ  
ンディ作りがはかどるわい」

マジヨリカとあたしはニニをつれて、キャンディ  
作りのほうに向かおうとした。けど、な〜んかモモ  
ちゃん、いつもより動き方が派手ねえ。

はづきちゃんはモモちゃんの着替えがまぢきれな  
いみたい。奥にしまったランドセルから本を取り出  
して、

「あ、モモちゃん。今日はクッキー作りよね。はい  
これ、ママにお菓子作りの本借りてきたわ」

「Oh♡ありがとはづきちゃん」  
着替えたモモちゃんがぱつと抱きついて

チュツ♡

「え!?」

次の瞬間、あたしたちの時間が凍った。

はづきちゃんの口元から、モモちゃんが離れる。

けど、はづきちゃんが動かない。あらら、完全に固まっちゃってるわ。

「は、はづきちゃん!?!」

どれみが慌てるのはいつものことだけど、今日はとびつきりね。

「モ、モモちゃん、はづきちゃんにあやまって」

「Why? 関先生、あまり緊張しないで、普通にしておいて、言ってる。何がいけないの?」

「なにがって あそつか、モモちゃんアメリカにいたから」

「そうよねえ、モモちゃんには普通なんだけど。よりによって、いちばん敏感な人のとこにいつちやっただわねえ。」

「うっ」

あ、ます。はづきちゃん泣きそうだわ。しょうがない。あたしがフォローに っ、何でマジヨリカが目の前に!?!

「マジヨリカ!!」

抗議しようとしたあたしを、マジヨリカがじろつと睨んだ。たまにあるのよねえ、「うっ」と。

「う、うああああん」

「はづきちゃん! 待って!!」

ああ、ほら、はづきちゃんが飛び出して行っちゃった。どれみも追っかけていつちやっしたし、残ったのは落ち込んでるモモちゃんだけじゃない!

あたしは恨みを込めた目でマジヨリカを睨みつけた。けど、そんなのをまるつきり無視して、マジヨリカはモモちゃんの手の上に乗っかっていった。

\*\*\*\*\*

「モモや」

しばらくモモちゃんの手の上でじつと顔を見上げてたマジヨリカが、ふっと口を開いた。

「お説教なんてしないぞ。わたしは結局アメリカの

子なのヨ。みんな、私のことなんかわからないワ」

「誰もそんなこと言っとりやせんわい。モモ、おまえははづきがどうして泣いたか、わかるか？」

ふるふる。眉間にたてジワつけながら首を振ってる。あゝあ、これは時間かかりそうねえ。

そう思っていたら、マジヨリカの目がやさしくなつた。

「モモや、魔女見習い試験1級の課題はなんじゃったかの？」

モモちゃんはきよとん、とした顔で

「え？ えっと 魔法を使ってThank youって言つてもらうコト」

「それも、自分が使ったとは言わずに、じゃな。どれみたちと同じ課題じゃ。」

おまえは、その試験に合格うかったんじゃろ？ だったら、はづきのこともわかるんじゃないかの」

「え？？」

マジヨリカがあたしに手招きした。あたしは二二

と一緒にいつものちり取りを抱えていく。

「人の気持ち、動物の気持ちがわかること。わからなくてもわかるうとすること。それがなければ1級試験になんぞ合格うかるわけないわい」

モモちゃんの目の前まで運んでいったちり取りに、

マジヨリカが飛び乗ってきた。もう。あとでな

にかおこつてもらわなきゃ！

「そんなの、考えてなかつた。わたしは、ただマジヨモノローを」

涙ぐんじやつてるモモちゃんの言葉を、マジヨリカが引き取った。

「もとに戻したい一心いっしんだったのじゃろ。じゃがな、きつとその方はこう言つぞい。」

『そんなことより、おまえが成長していくのを見られるのが嬉しい』と、な」

モモちゃんの大きな目が突然まんまるになって、じつとマジヨリカを見つめてるわ。

「どうしたの、モモちゃん？」

「Why? いま、マジヨリカがマジヨモンローに見えタ」

マジヨリカは後ろを向いちゃってる。ほんとに、照れ屋なんだから。

「師匠といつのはな、モモ。弟子に教わって育っていくものなんじゃよ。弟子だったおまえを見れば、マジヨモンローが、わしの聞いてるうわさなんぞよりずっと素晴らしい魔女だったことがよっくわかるわい」

「マジヨリカ？」

「わしもな、あの四人の弟子たちに色々教えられて、育てられて師匠になってるんじゃ。さっきのわしがマジヨモンローに似ていたというなら、あの子たちも信じてやってくれんかの」

「二二があたしの顔を覗き込んでる。あたしは二二の背中をそっと押してあげた。」

「モモちゃんの手のひらに飛んでいった二二が、モモちゃんを心配そうに見つめてる。」

「」

「まあ、もちよっと働いてゆけ。そのうち戻って来るじゃろ」

「モモちゃんは二二の頭をそっとなでてあげてる。」

「来る　かな」

「来る。あやつらは間違いない来る」

「ちよっとマジヨリカ! それじゃ怪獣よ」

「重々しい口ぶりなんかされたら、わざとやっててもツッコミたくなるじゃない。」

「似たようなもんじゃい。」

「モモ、覚悟するんじゃぞ。どれみは体当たりしか知らんヤツじゃからな」

\*\*\*\*\*

「キィー　ドアのきしむ音に続いて赤いだんごが

飛び込んできた。」

「モモ! 逃げるんじゃ!!」

「モ〜モちゃん」

「うわああア！」

むちゅっ〜っ!!

ジャンプして来たどれみだが、モモちゃんのほっぺに音がするくらい吸い付いた。

マジヨリ力はあたしの前で頭を抱えてる。

「 本当に体当たりしおってからに 」

あはは。まあ、どれみだものね。

「モモちゃん♡」

「ひゃあうア!!」

はづきちゃんがモモちゃんの背中からきゅっと抱き付いて、左のほっぺに唇を寄せた。

って、はづきちゃんも!? こ、これは予想外だわ。モモちゃんも首を縮めて椅子にへたり込んだじやっ  
たし。

「モ〜モ〜 ちゃん!」

へろへろのモモちゃんの頭の上から、あいちゃん

までおでこに向かって突進してるし。

「なにナニなにナニ了!!」

あ〜あ、モモちゃんもう泣きそつ。

「ぶわっかも〜ん!!」

何をやっとする! モモが怯おびえているではないか」

モモちゃんの頭にマジヨリ力が慌あわてて飛び乗っていったけど、ちよつと遅かったわね。

「え? あ、ごめんね。ちよつとハデだったかな?」

ハデって そついう問題じゃないと思っただけ  
ど。

「わたしたち、話し合ってみたのよ。モモちゃんアメリカぐらしが長いから、すぐにやめて、って言っても難しいんじゃないかしら、って」

「でね、キスしてくるモモちゃんを、ハナちゃんだと思っことにしたの」

「な なんて、ハナなんじゃ?」

うんうん。それはあたしも聞きたいわ。

「ハナちゃんやったら、みんなしてチュッチュチュツ



チュヤってたやないか。モモちゃんも同じと思たら別に気にすることないんやないか〜てな」

3秒くらいあつけにとられてたと思つた。あたしもマジヨリカも。

「そのかわり、今度からはあたしたちもするから」  
どれみたちの目が輝いているように見えるのは、あたしの見まぢがい よね。きつと。

「え!?……二人で、ナノ?」

椅子ごとずりずり後退するモモちゃん。怯えてる。間違いなく怯えてる。となりのニニまで怯えてる。

ドドたちにじりじりと迫られて、ニニが涙目になつてる。

「だ〜いじよぶ。おんぶちゃんにも連絡するから、あしたからは四人だよ♡」

あらら。モモちゃんつてば、ちり取りのうえのマジヨリカにしがみついちちゃった。まるで最初に会ったときみたいに、  
でも、

「マジヨリカア〜」

「じゃから言つたじゃろ、『覚悟せい』と」

「みんなマジヨリカのお弟子サンでしょ〜!!」

「安心せい。おまえも、その仲間じゃ」

うん。いい顔してるわよ。マジヨリカ♡

「なかま、嬉しいけど いや〜!!」

—おわり—

## キス・きす・KISS のこと

言い訳はしません。恥ずいはなしその2です。

最初で最後のつもりでアニメスペースに申し込みましたので、この際とことん突っ走ってみようかな～と。突っ走りすぎないように注意するほうが難しいといえ言えますが。

実際この本の $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ソースを見ている方にはおわかりのとおり、最初のコメントに『18禁にならないように!』としっかり書いてあったりします。気をぬくと忘れてしまうので(^\_^;)

「も～っと!」になって マジョハートがあいかわらず格好よくて嬉しいなあ というのは置いといて(^\_^;) 新しいキャラクターがいっぱい加わりましたね。モモちゃんに元老院のメンバー、そしてマジョモンロー。

マジョモンローがどんな魔女だったのか、いまの時点ではあまりよくわかりません。けれど、本文でマジョリカに言わせちゃいましたが、何のかんの言っても一人の魔女見習いをちゃんとした魔女にまで育て上げた人なのですから、その実力も推して知るべしでしょう。周りに魔女見習い仲間がいなかったことを考えれば、マジョリカよりもよっぽど苦労したに違いありません。

これからどういう風に描かれてゆくか、楽しみです(^\_^)

さて、次ページからはこの話の後日談です(当日ですが)。こちらの解説は**絶対しません**のであしからず(^\_^;)

## その夜のMAHO堂

大騒ぎのあと。あたしはひとりでMAHO堂のあとかたづけしとった。

マジヨリカとララも二階で休んでしもて、ほんまにひとりぼっちや。

「まあ、あれでモモちゃんもチュツチュしなくなるやろし、ひと安心やな。」

「チュツチュ　って?」

あれ、つて顔を上げたら、扉のところにだれか立ってん。

「あ、おんぶちゃん。仕事おわったんか」

「ええ。　それで、チュツチュって、なに?」

あたしは昼間のことを、つまんで説明したんや。

「　ほんでな、結局モモちゃん逃げてしもて、どれみちゃんとはづきちゃんてフオローに行くことになつたんや。ほいで、あとかたづけがあたしに回っ

てきたっちゅうわけや。

おんぶちゃん、どないしてん?」

説明の途中から下むいてるから変やな〜思てたけど、いまはなんや変な気配ただよわせとる。

「キス、したの?」

へ?」

あかん。いまちよつと固まってもつた。なんちゅう低い声や。

「あ、おんぶちゃんもしたかつたんか?」

ん〜、当分やめといたほつがええよ。これ以上やったら、モモちゃんMAHO堂来なくなつてまうわ」

「じゃあ、あいちゃんだったらいいかな?」

あら〜、いきなり明るい声やな。なんやありそうな気もするけど

「お芝居には、いろんな勉強が必要なのよ」

ああ、そか。キスの練習なんて誰にでも頼めるっちゅうわけにいかへんしな。いまなら他に誰もおれへんからちよつどええわ。

「あたしでいいんやったら、ええよ」

「ありがとっ！じゃ、ちょっと待って。外閉めるから」とたんに元気になつて、扉に走っていつてしもた。「わたし芸能人だから、写真とか撮られちゃうと困るの」

まあ、そついうもんかいなあ。あたしは頭をかきながら窓のカーテンを引いて、扉に鍵をかけてまわつた。

\*\*\*\*\*

「おわつたで」

「う、うん」

まだ周り気にしてるんか。芸能人ちゅこのもつら  
いもんやなあ。

「なんか舞台とかつくるんか？」

「え、いえ」

あんま言いたないけど、しゃあないが。

「う、うん、あたしもあんまそついうドラマとか見い

ひんから、どつやつたらええかわからへんねや。おんぶちゃん、教えてくれへん？」

「う、うん。じゃ、あたしがあいちゃんの体に抱きつくから、あいちゃんはあたしの肩から背中に腕を回してね」

ああ、なるほどな。おんぶちゃんの練習やから、あたしが男の子役なんか。ほなら、ぎゅっ　って、どんくらい力入れたらええんやろ？おんぶちゃんなんか柔らかそつやし　あ、そか。ハナちゃんと同じくらいにすればええんや。

ぎゅっ

を。なんかええ感じやな。

「じゃ、おでこぶつけないでね」

むっ。　まあ今日はおんぶちゃんの練習や。お

さえて、おさえて

ちゅっ

うん。鼻もおでこもぶつけてへん。ま、こんなもんかな？

\*\*\*\*\*

あれ？なんか変やな。なんかぶによぶによしたもんが、くちびるの合わせめを動いてん。

ああ、ペロでくちびるなめてるんか。『情熱的な感じ』っちゅうヤツやな。

あ、ええこと考えた。ちよつとからかったろ。こつちからもペロ出して　お。おんぶちゃんのベロめっつけ。ほな、つんつん、つんつんと。

あ　しもた。おんぶちゃん、固まってしもたわ。そつと目えあけて　あつちやあゝ目になみだ浮かべとる。ちいとやりすぎやったかな？

ぎゅうっ♡

を？なんやなんや!?ぎゅうっ、って。おもつきし

しがみついて来てん。

つるん

うあ！ペロで歯のつけ根さわってん。　歯あは

みがいたはずやなあ　あ、でもあたし、あのあと

味見してんで。クッキーのカスでもついてないやるか

って、心配することがちやうわ!!

そうや、あたしのことからこつてるに決まってる

やんか。だったらあたしも　おんぶちゃんはあた

しの下の歯あさわつとんなあ。そやったらあたしは

おんぶちゃんの上の歯や！

ペろん

あ、おどろいてるわ。へへへ。そつそついつまで

もやられてへんで。

けど、おんぶちゃんの歯って、つるつるや

なあ　あたしなんかよりやっぱよつみがいとるん

やろうな。

あ、あかん。ヨダしたれそうや。

ちゅるっ

あれ　？これって　ああっ！しもた、おんぶ  
ちゃんのペロまで吸い込んでもうたわ。

けど　ああ、なんやろこの感触。ぷにゅぷにゅ  
してて、なんや気持ちええなあ

あ！ペロ引っ込めてまっ！待ってえな。もうちょっ  
とだけ　！！

ぎゅっっっっ♡

「ん！？」

あ、ああ、しもた！つい腕に力はいってもうた。  
ごめんなあおんぶちゃん。痛かったやろな

ちゅるるっ♡

ふえあ！！今度はおんぶちゃんが吸って　って、あ  
たしのペロがおんぶちゃんの中に！！

あああ　なんやあったこつて　もうわけわか  
らへん

\*\*\*\*\*

ふう　抱きおつてから3分も経ってないなんて  
信じられへん。

「ん、ありがとあいちゃん。いい練習になったわ」  
おい。

「って、ごら！こんな…ンドラマでやるんかい!？」

「わたしって、芸能人だから」

おんぶちゃんがぺろっ、てペロだしてん。あたし  
は顔が熱うなって、つい後ろむいてしもた。

「きょうは歯磨きできないわ」

なんや聞こえたような気がするけど、気にせんとこ。

どっちのセリフか、あたしにもわからへんから。

—おわり—

## あとがき

え～、どれみ本の2冊目ですが、いかがでしたでしょうか？

感想がとても気になりますが、後半の話については訊くのが怖すぎますので、お気遣いなくお願いいたします(^\_^;)

さて、私はおっさんのせいか、大人のキャラの側からいろいろ見してしまうことが多いように思います。

実は今回も、webのほうで予告していましたが、もともとはお父さんsの親バカ話の予定でした。

ところが連休中にパトレーヌ以後のどれみを一気に見てたら、ネタが出すぎまして(^\_^;) どうにも收拾がつかなくなってしまっ  
て というわけで、今回のネタになりました。

本当はリリカおばあちゃんまで絡ませたかったのですが、そうするとページ数が一気に倍増してしまいますから、今回はあきらめ。もしまた機会があればいろんな人を書きたいですね。オヤジーデやマジョミラーもいい味ですし、それでもやっぱり一番はマジョハートですけど。

では最後に、この本を手にした(手にしてしまった方も含めて) すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@eastmail.com

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、基本的にコピーフリーです。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭  
発行日 2001年5月6日